



## 随 想

### パナマ運河

E・L・ヒバード

終戦直後私が日本へ帰ろうとした当時は、進駐軍関係の船以外に、アメリカ西海岸から太平洋横断の船はほとんどなかった。一日も早くもどりたい私は、止むをえずテキサス州ヒューストン市から出る貨物船に乗りました。ヒューストン市は港でも何でもないの

ですが、市を貫く河を深く掘り、かなり大型の船でも河口より三十マイルもさかのぼることができるようになってあります。

メキシコ湾を出ると直ぐパナマ運河に入り最初にガトン水門を通りました。すると三段になった水閘のとびらが自動的に開閉し、水面が見る見る上って、一分も経たぬ中に二メートル位に上り、十メートルに達すると自然に止まり、そこを船は六台の電気機関車にひかれて、ゆうゆうと次の水閘に入って行ききました。ここを出てガトン湖という琵琶湖ほどの湖に入ると、点在している小島には、熱帯植物の棕櫚やパパヤや胡椒等が青々と繁り、所々に真白な滝が崖から湖に落ちていました。島のそばを通る時は、木の枝にエメラルド色のおうむや、黒いのすりが止まっているのがよく見えました。風いだ湖を静かに行く船は、鏡のような水面にその陰を写します。この夢のような美しい静かな風景を後にしてクレブラ海峡に入ると、その男性的な雄大な景色に驚きました。両側の崖は工事中たびたびなだれが起り、そのため多くの人命が犠牲となったそうです。その海峡はやつと船が通れるほどの幅ですから、崖の表面につけて

ある運河開通記念の銅板の文字もよく読めます。このクレブラ海峡を通過すると、水面は太平洋と同じ高さになり、船は最後の水閘を通過して大洋へ出るのではありません。

私はパナマ運河を通過しているいろいろ考えさせられました。中でもこんな大規模な工事は、想像力が絶対に必要だということでした。十六世紀に最初パナマ海峡を運河にするという提案があった時、多くの宗教家はこの種の工事は神の御旨に反するものだと強く反対し、なかでもアスコット神父は、神が必要を認めればすでに神自らそれを造り給うたであろうと主張しました。それにもかかわらずこの大きい幻は実現しました。しかし多くの人力と失敗の結果、ようやく完成したのであって、その尊い努力を私達は永く忘れずまた感謝しなければならぬと思います。同時にこういう世界的な計画を実行するには、個人や一国の力ではとうていできぬということに気がきました。運河を掘る資力や技術の乏しいパナマ人が、その土地をアメリカに提供してくれただからこそ、この大事業の成功を見たのです。しかし直接工事に従事した人は報いられずにむしろ、その子孫が利益を受ける

ようになりました。また完成後アメリカは、各国に平等にその便宜を与え、その結果、世界貿易は盛んになり、お互いの生活が豊かになりました。

現在私達同志社人は、九十周年記念の募金運動を目前にして、大きな幻を見えています。そしてその実現には全員が力を尽して協力しなければなりません。しかしその報は私達ではなく、子孫に与えられるでしょう。それを知りつつもなお喜んで寄付すれば、将来同志社はバナマ運河のように、世界に喜ばれる存在となるでしょう。(女子大教授・英文学)

## 「永遠の凝視」

河崎 洋子

閉館時刻に近いせいか、思った程混んでいない美術館の中で、第一に私の眼を引いたものは、「埋葬用の頭首」である。朝日新聞にも紹介されていたものと思うが、瞳のない大きく開かれた目が、焦点を結ばない世界に向

けられていた。

その影のない明るさが、五千年の時を超えて、何処かへ昇華してしまっているような気がしたとき、私は子供の頃の情景を思い出した。それはあまり思い出したくない景色でもあったが、小高い丘の上に登ると、平原にくつきりと雲が影を落し、大地の広がりを一層強調しているような南満洲鉄領でのこと。春秋の景色が美しい龍首山の山腹にころがる髑髏であった。比較的新しいものから白骨となったもので、野犬にあらされ風雨に洗われた敦首刑死者の首である。今から思えば、関東軍を相手に、蟻螂の斧をふるった人々の多くが含まれていたであろう。小学生であった私には、その存在を意識するだけで、凝視されているような気味悪さを充分感じて、観察する余裕など全くなかったのに、焦点のない目をさえぎる如くに思い出したのは何故だったのか。

つぎつぎに見て行くなかで、あのエジプト彫刻特有の「永遠の凝視」なるものが気になるってしかたがない。まるで凝固したかのような不動の姿勢のなかに、かえって動的なものを感じるのに反して、永遠に対峙するものを持たない瞳に死が決定的な姿をとっているようだ。

ところが、末期王朝時代に近いものであつたらうか、彫刻の目が焦点を持っている。勿論、王達の像ではなく、王を含めて神々にかえる人々の一つであるけれど、足もとの大地へ向かつて注がれているように私には見えた。主観的な印象だけれど、王達に永遠について語つたであろう司祭の目にもそれが感じられ、神々と共に生き、神々に仕え、神々のために労したその中で、来世でも変わる苦役に生きねばならない働き人達の姿をかいまみたように思つた。

足もとに注がれた目は、自分の生活の場を見、具体的な営みのさまを見、やがては人に向きあい出あう可能性を持つていよう。しかし永遠に焦点を結ばぬ目は、決して人間に出あうことがないであろう。

勝手な想像をしながら会場を一巡し出口を出た時にはちょうど五時になっていた。

原爆被災国から核装備国へと転身しつつあるこの日本で、美術館に足をはこんだ多くの人々の目に映じているものは何であろうか。どれだけ自分自身の生活をとらえ、歴史を

凝視しているのか。

人間を見失い、出会うことを忘れた大きく開かれた瞳のない目が私達の囲りに見えない垣を作っている。

外に出た私の耳に、広島の水鏡大会を成功させようと呼びかける学生の声が、垣を破ってとびこんで来た。  
(宗教部主事)

## 無形の素材

### 重 森 完 途

われわれの祖先達は、実に素晴らしい造形感覚を持っていたといえる。

たとえば、日本の古典の庭の数々に見られる、造形の妙は、その芸術的な次元の高さに於いては、欧米庭園に比しても証明できるであろう。

その計画・地割・デテイル・素材、いずれも高度な造形感覚がなくては、出来得ないものばかりである。

素材についても、実在の樹木・石・砂など

は、もちろん、デリケートな配慮がなされているが、さらにおどろくべきことは、無形の素材に対しても、チャンと計画性を持たせて取り入れることである。

雨・風・光・霧・音などの無形のものともそれを庭の中に素材として導入していることは、風俗の設計ではできないことである。

このような、無形の素材が庭に這入ることは、庭自体が、やや文学的になるくらいが面白いでもないが、このことは、生活に充分密着したところから生まれてきたのである。

ということは、どのような形式の、どのような形態の庭にしる、人間生活と深い結びつきがあった庭が、傑作の作品として残ってきたものではあるまいか。また、傑作というものとは、それができた時代を代表する、最も新しいものであったはずである。

そこで、現代を考えてみると、一体如何であろうか。

都市やその周辺は無計画である。無形の素材どころではない。有形の素材も無視されようとしている。

山岳などのダム建設も、案外無計画である。都市やその周辺部に関しては、人間と自動

車の氾濫が著しい。特に自動車の湧出は眼を見張るものがある。しかし、これも、人間生活にとって不可分のものである以上、計画的に誘導しなければ、逆に、自動車のために、人間生活が停止してしまうだろう。そうなれば、都市の機能も何もかも、立往生してしまうのは必至である。

そこで、一つ提案がある。人口が五万以上の都市は、その都市の出入口や、中心部に大きい駐車場を捨てる。もちろん、都市の形態や、性格によって、その場所や大きさは計画されるべきである。自動車を各ポイントに誘導してしまえば、交通もスムーズになり、緑と、太陽の恩恵を充分うけることができるのではなからうか。

山岳のダムサイトも、人間生活にとって必須のものである。といって、周辺の自然の風景を無難作にこわされては功罪相半ばする。アメリカでは、ダム計画があるとき、真先に呼ばれるのは、ランドスケープ・アーキテクトだそうである。

ランドスケープ・アーキテクトによって、周辺の風景計画が検討され、その決定によっていよいよダム工事の計画が始まるそうであ

る。日本のダム工事では如何であらうか。残念ながら、そのような話は、まだ一度も聞いたことがない。

この現状では、都市も山岳も数年か数十年のうちに、満身創痍になるだろう。

そのよい例が現在の東京ではあるまいか。

有形や無形の素材の重要さは、庭だけのものではないはずだ。都市を含めた、大きい人間生活のための自然に必要なものである。

そこから、別の自然が生まれたり、芸術が生まれたりするのではなからうか。

(校友・芝浦工大講師・造園学)

## 暖 簾

松 岡 英 士

同志社商業高等学校は私の職場である。この学校の女子新卒業生が、ある一流会社の就職試験で合格の通知をうけた。数日を経て、京都の営業所長から定時制であるために本社がどうしても許可しないので取り消しを申

し入れて来られた。本人の自宅は勿論、学校にも丁寧に断わりに来られたわけである。成績が良い上に何より人柄のよいこの人は直ぐ他の金融機関に入社し非常に重用されていると聞いている。しかし本人のショックは大変なものであったらうと思う。

経済同友会や池田首相の「定時制差別撤廃」の呼びかけに、拍手をおくりたい気持ちに「いままさら何を」という気持ちも混合する。世の経営者の、重要な仕事のはずである「人物」を集めることに何と不忠実であることかということ。こんな簡単なそろばんのできない経営者のもつ企業経営のあまさをあやしむのである。

新制高校発足と共にできたこの学校も十三回目の卒業生を出そうとしている。学内のあちこちの職場にも本校の卒業生が沢山働いている。中学、高校、女子高、大学に、本部に。今年もまた良い子を推薦して下さいといわれる。有難いことだと感謝している。同じ採用するなら同志社出身をというお気持ちもあろうし、従来の卒業生の実績もご覧になってのことであろうと思う。この学校の「暖簾」もばつばつ生きて来たのかも知れない。

私の専攻する簿記学に「暖簾」あるいは、「営業権」という勘定科目を設けることがある。「現象形態的には営業所の位置・商号・商標の普及および経営方法の優秀等の原因によって、他の同種企業より収益率が高い場合その収益を資本化した金額を暖簾という」(木村和二郎・簿記学入門)のである。もっとも

これは会計学の原則で営業譲受等に限られるのである。英語では、「暖簾」は GOOD WILL にあたる。直訳では「善意」であろう。商号・商標を簡単に表示したものは店先に掲げた「のれん」である。単に安いから顧客が来るものではない。販売者の永年の誠実さと、世の善意が「暖簾」の存在を可能ならしめたのである。無形の資産となるのである。商高の卒業生は誠実で仕事ができ、その上明朗であることが好評をいたたく。「商高」という「のれん」は、卒業生達の実績評価もさることながら、これを育てて下さった皆さんの GOOD WILL によって評価されて来たものである。こうした感謝の間に、それでも時にどこかに残る定時制への差別に腹を立てたり商高勤務もなかなか多忙である。

(商業高校教師)